

日本一の犬好き県 香川県におけるペットの飼育状況と消費の現状

厚生労働省の調査から、保健所に登録されている100世帯当たりの犬の頭数をみると、香川県は15.37頭と47都道府県で最も多い。この結果を踏まえ、当研究所では、犬も含むペットの飼育状況やペット消費額について、今回初めて県民を対象にアンケート調査を実施した。その結果を取りまとめたので、以下に報告する。

調査結果のポイント

◆ペットの飼育状況

- 厚生労働省等の調査から、香川県は100世帯当たりの犬の登録頭数は全国1位と、日本一の犬好きである。
- ペットを飼っている県民は28%で、東讃、西讃地域が高松地域等よりも多い。
- 飼育しているペット種類は(複数回答)、犬が49%で最も多く、次いで猫が42%と、上位2種類に集中している。
- 犬を飼っているのは男性、既婚、子供同居の世帯が多く、猫は未婚、子供同居無しの世帯が多い。
- ペットの入手方法(複数回答)で最も多いのは、犬が「購入」で、猫は「拾った」である。

◆ペット消費の支出動向

- ペット消費の月間支出額は、1世帯当たり平均で、犬は15,964円で、猫が16,028円である。
- 支出内訳では、犬は医療費が5,391円で最も多く、次いでペットフード代4,921円。猫はペットフード代が6,335円で最も多く、次いで医療費4,384円であり、ペットにより支出構成に違いがみられる。
- 最も多く支出しているオーナーは未婚世帯で、犬が20,860円、猫は19,368円である。

◆物価上昇の影響

- 最近の物価上昇による影響で、支出額が「増えた」の回答は36%にのぼる。
- 支出額が増えた理由(複数回答)では、犬が「医療費の増加」、猫は「ペットフード代等の増加」が最も多い。

アンケート調査概要

1. 調査期間: 2024年8月29日～9月3日
2. 調査対象: 香川県内在住の20～69歳の男女
3. 調査方法: インターネット調査(調査会社のモニターによる回答)
4. 有効回答数: 513人(世帯として回答)
5. 回答者の構成と属性: 次の図表のとおり

■年代・性別	計		
		男・構成比	女・構成比
20代(20-29歳)	79	6.8	8.6
30代(30-39歳)	108	11.3	9.7
40代(40-49歳)	108	10.1	10.9
50代(50-59歳)	109	9.7	11.5
60代(60-69歳)	109	11.3	9.9
合計	513	49.3	50.7

■地域別	人数		構成比	
高松地域	270		52.6	
中讃地域	134		26.1	
西讃地域	61		11.9	
東讃地域	48		9.4	
合計	513		100.0	

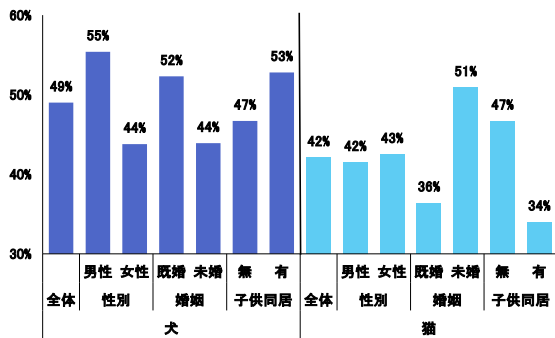
■子供同居の有無	人数		構成比	
同居無	342		66.7	
同居有	171		33.3	

■婚姻別	人数		構成比	
既婚	298		58.1	
未婚	215		41.9	

注)四捨五入の関係で内訳と合計が必ずしも一致しない場合がある。以降、本文中の図表も同様
 なお、本文中では「20-29歳」を20代、「30-39歳」を30代、「40-49歳」を40代、「50-59歳」を50代、「60-69歳」を60代として表記している。

猫では、男 42%、女 43%と、差がほとんどみられない。また、婚姻からみると、犬は既婚者の飼育している比率が 52%と高いが、猫では未婚者が 51%と高く、犬と猫で明確に分かれている。子供同居では、犬は有(同居あり)が 53%と高いのに対し、猫は無(同居なし)が 47%と高く、はっきりと差が出て

図表 1-5 県民特性による犬・猫の飼育状況



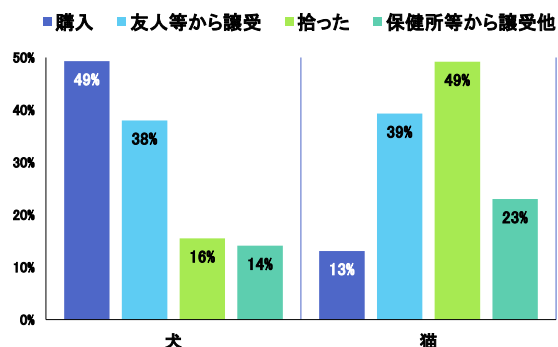
いる。

(3) ペットの入手方法

県民オーナーにペットの入手方法を複数回答で尋ねたところ(図表 1-6)、犬は「ペットショップやブリーダーから購入(グラフ表記:購入)」が 49%で最も多く、次いで「友人等から譲受」38%で続き、「拾った」16%、「保健所や譲渡会、新聞・情報誌から譲受、その他(同:保健所等から譲受他)」14%となっている。

それに対して、猫は「拾った」が 49%で最も多く、次いで「友人等から譲受」39%で続き、「保健所等から譲受他」23%、そして「購入」が 13%で最も少ない。ペット種類で、入手方法の違いが際立っている。つまり、県民のペット入手方法は、極論すると犬は購入し、猫は拾うのが主流のようだ。

図表 1-6 犬・猫の入手方法



2. ペット消費の支出動向

オーナーがペットを飼育するのに1ヶ月間に世帯でどのくらい支出しているかを、ペットフード代、ペット用品代、医療費、及びサービス料の 4 点について、金額階層によるアンケートを行った。

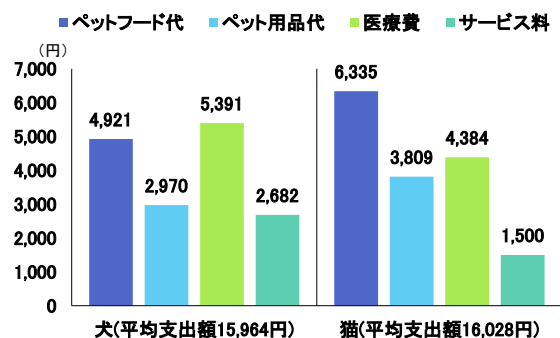
なお、ペットフード代は餌代、お菓子、サプリメント等の代金である。ペット用品代は、トイレシート、服、おもちゃ等の代金。医療費は、動物病院等の診察費、検査費、治療費、ワクチン代、薬代、保険料等である。サービス料はトリミング、ペットホテル代、しつけ費用やトレーニング等にかかるサービス等の費用である。

(1) 消費支出

ペットフード代、ペット用品代、医療費、サービス料のアンケート分布から、月間消費支出の平均値を犬と猫で推計した。

その結果、犬は 15,964 円に対して、猫が 16,028 円と、ほぼ同額になった(図表 2-1)。その内訳をみると、犬は、「医療費」の支出が 5,391 円と最も多く、次いで「ペットフード代」が 4,921 円となっており、「ペット用品代」2,970 円、「サービス料」2,682 円と続く。猫は、逆に「ペットフード代」が 6,335 円と突出して多く、「医療費」が 4,384 円で続き、次いで「ペット用品代」3,809 円、「サービス料」1,500 円となっている。

図表 2-1 犬・猫の平均支出額と内訳



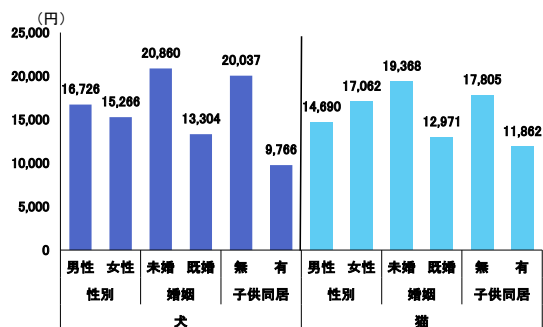
(2) ペット消費の県民特性

犬、猫の消費額を性別にみると(図表 2-2)、犬では男性が 16,726 円と女性より 1,460 円も多く支出し、猫は女性が 17,062 円と 2,372 円も多く支出

している。ペットの支出額に男女差が表れている。

婚姻別では、犬では未婚(世帯)が 20,860 円、既婚は 13,304 円、猫も未婚が 19,368 円に対して既婚(世帯)は 12,971 円と、未婚(世帯)が 50%以上も多く支出している。

図表 2-2 犬・猫の特性別支出額



また、子供同居でも、犬で有(同居している世帯)が 9,766 円に対し、無(していない世帯)は 20,037 円と、倍以上である。猫も有(同居している世帯)が 11,862 円に対し、無(していない世帯)は 17,805 円と、5 千円以上の違いがある。

既婚世帯や子供同居世帯に比べて、未婚世帯や子供同居無の世帯は、自由に使えるお金が相対的に多いため、ペットに多くを支出する傾向がみられる。そして、ペットに最も多く支出しているオーナーは未婚世帯で、犬が 20,860 円、猫は 19,368 円である。

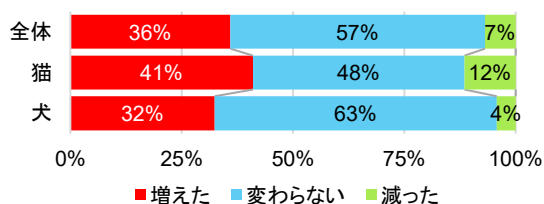
3. 物価上昇によるペット消費への影響

(1)消費への影響

最近の物価上昇によるペット消費への影響について、ペットオーナーにアンケートを行った。その結果、支出額が1年前と比べて「増えた」との回答は36%に上り、「減った」は僅かに7%であった(図表 3-1)。

「増えた」と回答したオーナーは、犬が 32%に対して、猫は 41%と、猫が少し多くなっている。

図表 3-1 支出額の増減

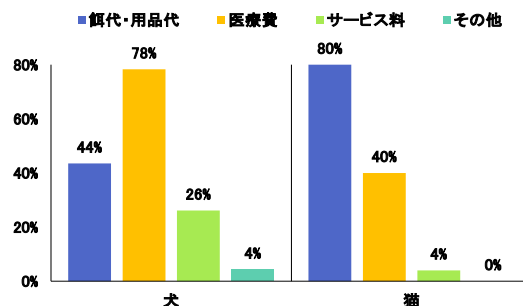


(2)支出額増加の理由

支出額が増加した理由を費目で尋ねたところ(複数回答)、犬では「医療費の増加」が 78%で最も多く、次いで「ペットフード代・用品代の増加(グラフ表記:餌代・用品代)」44%、「サービス料の増加」26%などとなっている(図表 3-2)。猫は、「ペットフード代・用品代の増加」が 80%で最も多く、次いで「医療費の増加」40%などとなった。

なお、「ペットフード代等の増加」は原材料の肉や魚、穀類の高騰によってペットフードが大幅に値上がりしているためである。また、「医療費の増加」は、薬代の値上りや治療費が高みちな高齢ペットの増加などが影響している。

図表 3-2 支出が増加した費用項目



おわりに

今回の調査から、県民の 28%がペットを飼っており、そのうち飼っているペットは犬が 49%、猫が 42%であることが分かった。ペット消費では、1世帯当たりの月間平均支出額は、犬が 15,964 円に対し、猫が 16,028 円であった。そして最近の物価上昇によってペットオーナーの 36%は、支出額が増えたと回答している。

今後も、ペットフードや医療費等が値上がりすると見込まれており、県民オーナーにとってペットは可愛い、懐には悩ましい日々が続くそう。

以上